わ百義 五

喜鳥二篇 廓之櫻 全

へ13
2848

百五十一番

へ 13
2848
旧遠
1984
21

言葉島
二篇目 廟乃櫻

さてさ智ばば。本殿、臺一面の花。えべく。
よ原仲の所乃景色なり。夕ぐれ雅楽
夢義。植迦去夢れ櫻朱乃。下仲れ
桃灯ゑ。坊主兎の丈よりるく。極く
切〳〵燈床ルゝへ。伊久大臣乃えく。燈
管乃四より。高博の臍乃通ゝ。郭り丸

百五十一番目

ふ48
ノ13

二篇目　櫻乃櫻

さてさて勢ひ。ことば。本歌。臺一面の花。さくさく。
よ。原仲の所乃景色なり。夕ぐれ。
夢義。植迄去夢なる櫻。木乃下艸
桃灯。ゑ。坊主兎の丈。ゑ。
切〳〵。床ル。ゑ。伊久大臣の。ゑ。煙
管乃四。ゑ。高慢の横面。ゑ。

へ18
2848

髭は更に長く。延び過て鼻毛い。腰を
ぬかす程よろつく。茶の湯の懇。鉢巻か
らの方。冠て人間世界の思ひ。助六が我く
けつの子を。縮角の黄夫人。彩しき毛。終に迷
手の間付柱小陽ちら。面白酒ぐ。苦勞
酒を。言ども不醉。視ゆるうち。花の
色中。聽ども味なし。左右の。茶屋揚屋
ものもいはぬ。三拍子。

幕明。

西の
きり春

梅鼻暮里谷峩序

目録

初幕　三浦のぐん
二立目　吳見のぐん
三立目　縁切のぐん
四立目　待伏のぐん

廓れ桜

二番目初幕

梅暮里谷峩著

月おぼろ雲を霞の手をくぐり人眼を彼らん花も
風ふ散らぬんばかりまるもうすひる蔭しされば
つゝみのみつうくまも関ふしがこを仏をけうう実
あるゆとをもゝ暮ふハゆぎるとをざるう思ゝ人ハ又
ゑげくもうもいやゆハ金ぎあゆ通ひしよりゆ丈人ハ
あんもかゝゝ代式大臣 伊久 ちんどやふゝ代人ゝゝ

わつふさわぎだやのコレ芝ぬぎや命うゝ二年長月の大事
の金をつかいく来るハ外芝のうひ事じやがろう
ひ是程ごろしぬゐ森も甚ずゝおきもせどそのやうふ
つく程んゝてぞゝてくまるのごつちうわ人情ぐ
あゝふとれとうハガアノ仇六小ふたてる石井でもあろうが
ハテ助六ゝゝ一ゝがちつさかるまゝゝおまふあ
ほとして何ともく六が六ゝ一ゝ一ゝふ決もあるまひ
そして助六ハせうりてあじげられねぐらあれうそん

かりゝ程度のことぐマア四刀(仏)本たてゝあるあぐゝゝ
ハそうやそう雄薄雲小紫の時代のそうそんと今ごろ
まあ一ぬこゝぐ今でそうそうりのつよんの八芝居の廿郎
ばうりんまりかうハうりやうそんゝやゝたひゝふりのコレ
来る取ゝゝひゝう森ぐつぐんぬ六ゆ(ふ)こんゐ員工あ
もらまてゝ赤所(きゝえてゝもそねぐひ一度ハあつて
そゝ子ぐあゝぬ揚巻マアそゝゝあつてたりまと揚巻うそ
くゝぐものやゝみりのぐでも咲そもそふいつておうん

ゑんとふうれきうざんすがおめ（さんこそふうんどゝで
ざんさん 四ノ久 なぜふ 陽毫 されでざんと若むゝさた
さんがゝつそかとくいゝゑんとと世（せん）のゝゝさそれ
とゝゝとゝくかおゑんとやゝゝゑうにきつまゑおめ（さんふ
どうまゑんがゆうされく（とりの之 四ノ久 いけれ（よりても
おんれ（ママ）きうんせおまゝ（ごさふとれゑ（いゑも東ゑ
ゆりでゑけアやうゝ六ゝゝひいろそなゝふ云（い）ひか
らゝてゝてもちまゝの何（つゝば）ともちやくちやゝゑりて

ゝんとむちやじやゝく（アノワルモノさたが幸いつゝけ
がまゝゝくゝふどゝいゑゑ仏がまゝてのゝとゝ（アノ助六とた
じゝえのゝちいゝとりたのふとゝ所がゝふいつふゝゝそおゝゝ
らゝんがこれづくでいハ金のてゝ（ごく）ごゝゝてゑ六ゑゑの薬（く）の
たつのでゝゑいそこでゝふゑゝゝゝふゑゝ助六ハつまゝだ
ゝれ（ごぞやて 陽毫 ゝゝんゑゝゝおゝ（さんの十ゝ（しゝん）とゝふも
のでざんをすまゝば助六さんふ姐（ゝゝ）ゝそうけゑんをゝど
ざふねゝ成ゝれゝれゝと云ハゝんゝ幸ハありゝそふもれく

ようでざんを[いえ]そこらやてぞふやうり人(にんやうじやが
かんぞんの釜才ふせうらとえて故六の家の門い
さうとうふしてあそでせさぶやらうばきだされてかう
といよりのいえをろくふ新をこせねゑんじやつてもん日
の日いろくおそで寺正月ゑ六百ホさ寺ごらんてやち
さその悪もこれいたひまれ氣強氣佛それもこ人
てやまいものでもあんがこそりあ痩喜(めしもろりく
こそねこのこと東へ若衆ゑんがうつてこのように

ようぢらふといろれいやろうがいくらるりと変てたれ
ワさくーハ人の中ごでいのちようけくおこふお人に
あんゑんこれをきひしたゆえこりゆもんれてもむ
ふろこれでは中に悪いとこいふふ兵ともちこた
東へこるや逢といふこるやそのように根ごひゑんせんでも
ようざんをおめえさんがあきこなんしても害ことゑ稼
ぞでらちのあねりりでうんとこぞふいーがくるゆ(廿六
この中と別れようなあくごとうばいくとるゆえいの通りけい

がうまいさうひあんどん（手前）前ぐうり如帋であるまひし
おもしろこどばそらゝゝこゝこゝこ

いとゝひでゑひかうつく実とゝせてゝも馬耳風轟
面水くゝしい事をいて出とゝりぐるいはけいてゝゝ
てゝ一だんさてゝかんせ 揚屋 おめくさんそうに事をと
事ていゝゝんとゝらずいぶんきゝゝぐけてあけゝうざ
んとゝがそゝうちいゝていゝろちのつぶがるうざんとかゝぶ
そそゝうふされんせん いく そうやゝ丈人 揚屋 あんてゞん
せゝうゝもようふざんとそれざゝら神よお出ゝんしたゝた
りさくゝゝげゝゝろえお出ゝんとふうまゝうざんすがゝき

くゝゝふ来遍ゝすの丈くゝふでゝあゝくさんのきよへいり
いとゝめくゝらゝ行ぐゝれゝゝとおゝくゝゝんとゝゝあゝとゝゝろ
てゝおきゝるゝゝたゝきくゝゝふつゝゝゝれ月のゝくゝゆくお出
ゝんとゝれゝふ出ハでんとゝがいつゝまでおいつぐなんゝてもた
ゝゝゝでで来のゝゝでざんすゝゝゝせんどもゝよき
ふいゝんゝんゝとゝ出ゝ月ゝゝゝゝゝ場合おくいゝんゝゝれ
ゝゝゝゝ外の内へいきゝんゝとゝゝもかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝんせんとゝゝでゝいゝゝゝたゝゝ人ゝまゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆえ[あり]ぶぐ[ぐ]奥のよこ[横]ぬようふうこ[こ]ぶんてい[い]した[た]を
れもきこ[こ]られるんせ[せ]ぬ[ぬ]通[とう]てひつあなんしたを思[おも]ふけ
てかまはれいすんとが世[よ]うへ[へ]なんといふんてもむぐで
ざんとくふりつまんもいつく[く]おくんぐ[ぐ]んとなまこ[こ]ぶうへ
に乳[ち]ふさるるものや顔[かお]のようどれる事がでたてらるふ
さんとくふ[ふ]　いく　そんぶ[ぶ]くれ[れ]ぬえもおもたんぐ[ぐ]るかも
いふのう　陽巻　ワさんふ[ふ]今[いま]いふ[ふ]とりの名ゆえそ[そ]ぶや
おめ[め]へさんのうんゆ[ゆ]せふ[ふ]ぶんすぐい[い]

伊久も助六ぶつきだ[だ]せ思[おも]ふまま[ま]に若[わか]ふ[ふ]ぶ
の新[しん]をふ[ふ]ぶんと抱[だき]しめ[め]ふ[ふ]ぶんまさうぬの
事[こと]ふ[ふ]ぶ[ぶ]ぶのうちふ[ふ]ぶすぜあのようふ[ふ]ぶ六[ろく]ふ
ぶ[ぶ]ふること[こと]を一度[ど]ぶ[ぶ]ぶ二度[ど]ぶまで[で]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ふと
ちぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶのときふ[ふ]ぶふ[ふ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶ
いく　羽織[はおり]を[を]ぶ[ぶ]ぶてふ[ふ]ぶんせ[せ]　陽巻　おいふ[ふ]ぶんぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]

ハれ人 揚屋 それでもあんで暮いすかゝ いく たまゆ
揚まち でゝゝゝゝゝゝゝゝゝ いく とんざゆゝゝてんざ
ゆふあるあよゝよするぶいゝ 揚まち 主町 ハどゝゝもゝいゝゆゝ
ゝゝ

伊久 ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

でもこそふる隅をくめるはしらをでゝ人の金銀を
出して揚くゝ為く女郎を一文すれすれのくを
ふるを打ひそれぞやよろくゝ云のびらく稼てゐをむ
やすれば面の星もよろかぐ銭氣のゆひかしこくゝ
あれこらゝの星は光りのよい事人間を黄金
星こもいふぐあらふはゆゝ金の光りはかく金ゝ
のじや 揚まち それでざんを 茶屋 アノ一ぢんふひりゝ
もろお星さゝ 揚まち アノ

ぬおけゝさんでざんをゝくゝふれどぐ
さんゝゝがお星さんでもそのようにぐづひを志ん
と抱人がいろをかもひそゝでざんを 四ク ふくむ
をかふそゝとちふのくあるもうき世ゝ
 茶屋 それでもつさゝのでござりまし
とふゝやゝつまれば あぶまたへそゝふ
ゝゝ六ゝが茶屋 きまり
 揚まち ようまざねさんねみさんゝゝ成かこ

してかえりハ[illegible]ん[illegible]ん久（[illegible]）かんろうおん
ぢやりを[illegible]りくしゃ[illegible]て乗まりさ（[illegible]）そうで
ざんそうろうおつかさまでおせゝで遠てる成きてゝ
もなんのうれと[illegible]ぢやりいしてゝうとぎまろうゝ
ざんしたおのあ人をかいそうゝ抱のつゝしてゝも
きゝ成まいして高地小かつていゝとうどうせゝ
ちひいしゝご今秋かどやりるひのきいさるの
ざんせん（[illegible]）そんるゝおあ人いおうえりうあさま酒ゝ

さん（[illegible]）アイサ久（アひしたよ今秋ハ不森ゞあゝ赤どん
ざんさゝゝを服ゞきゝんせんかゝつまとやてまりうんせよ
[illegible]（[illegible]）今秋ハ仔久がきさゝいうさかゝまさだまゝ
さらうゝとゝつゝゝ冷ゝふゝれるいさ（[illegible]）うさゝゝゞゝふ
ようでゝ福ゝ久ゝゝい氣うゞうさ（[illegible]）おいでうんゝ（[illegible]）
ゝうゝん
お待ゝもゝゝゝて参ゝうゝさゝ秋ゝ尾か
見ゝゝこゝひ事ゝも有ゝゝゝし悪路のせゝの

くるまぎるまうん〜二階へものぐせ故
揚屋 これ〜さらびさうんごせうでさんさらさ
火でらでうんをしておくうんうん〜助うん油をに
ぎりきんさらさ家へさらつくおぐうんうんな 外六
うんぐるまあつさらいいさだで 揚屋 うんさらさで
ぐんせうしうんさうんてあぐやいせう
揚屋 六 えしぶりで中ほうふきさらさだで 揚屋 人中
のいうさとおつきれんしうふいうすよいえん

せうちうしさるときていせん 外六 いゝ事ばかりうんぐせ
おまえ家づうひ移へが手へ伊久よんどたおきれ
わへうふさしやいつうせうちうもさもれへ 揚屋 およ
うさせうちうしたちうよそれを手うもされうん
をぬへうさうしおぐけあもおのうふふんうえる成
いうさもれしさうらぐさらいをさ 外六 ラットごめんく 星蔵
サア うんぐできんしたぐうんでおあぐうんさえ硯ぐさ
のものでもあぐんせうわね 揚屋 ぜうさやうしうん

伊久さんがさぐらくゝゐみてきさのくゝざんをアノ絲
ざんをの内上鯛のこゝを湊げありいせゝ（ごぶまぐ）四ヨ　りんよそ
うざんしたね　揚　それゝゝかさんハ五分切（ごぶまぐ）をとゞでざん
をかゝをまぜざしておくうんゝ　四ヨ　ゆさいせゝうゝ　揚
よふざんをあゝハゝさうゝ　ぶ　ちいさかゝ　祝ゆんゝ　次
それでも一ツのまゝ移人の　四ヨ　アイ　揚　あのこハ寝るたゝうぶか
つてぐざんをかまゝゝも一ツのゝゝゆんさゝうん　四ヨ　いゝうん
ゆゝかんゝゝんいゝんおゆさゝゝゆんゝ　こよたりいさかゝ

用ぶあるゝゝおこゝゝおくゝゝゝんゝゝ（とゝのうゝ中たわり）　次
きどゝゝゝゆゝどよゝゝゆゝゝる　揚　アイサ　ゆまれさ
ゆハひゝあきゝゝでざんをサア　おあどんゆんゝ（はゝちかゝるあり）
次　ようゝ伊久ハゝくつゝさの　揚　マア　おゝさうんゝいろ
そぐちをいゝたらけげたゝじめかゝこゝゝくく
おきひゝたゆぶあるかゝゝゝさんゝもちんぶゝに
ゝてゆりひゝゝちきろくもいゝ炭腹をたろ
ていろくゝゆあてゝすりといゝてゆりいゝたを

ておうしひとごてへざんせん手ゆくでもゆまめい
紺ごとをつかつて江戸の河をつよかつて
のこをふかいこをうまへざるワういせん図それん
つよかへ出まば江戸おやこをとつきあつ用へゆと
こをかざあこざのこものぶおいこうこ食の物言こいふ
ものでうこを弱りぎ（此ものあ毛 アノ みハ一ぢうけ毛ぞ）久こいふ男も敵
ごこしでもあるようくお足をゆくづくハ粗ア を
さろ 揚（アイサ）おめえさんのこころえいう

移へりてよりうえしてこうう幸（てい）みをこうこうころさ
ここ病ガ島ひの浦ク苦むこえたさんこつきぶされ
それもおろくさんまぐこいこてれまぐこさこつぐさ
ころえ来て金くせう労おめくさんのりノ成まづくさ
せたくこ思ふもうえのくこ屋ロんまりき
ゆこうんれぐさんさんこけう
あくこ来ガあつ面こうざんこれ図ワ母こうこれ
年ガいうわくこはいすガこ容成こうまこさ

ちこのもちゐとすぎ[illegible]のすがたかりんとうやがーまぐ 揚 すう猛人のごと
ごとくにはかりのひせんがワるもーまさんのあるて、
まつさーマアごのやうでざんしやうしてふーふ
ぢきに死でもあるいつとわるえさんのもどふまさ
ふかうはすぐ秋すんさどばはごろハ万ちぐんの伏も
さちおいですんをやうよすぐりとうハ野ふく
すーふよとおひすんせうねぞすぐおあんの奥の
たつうしてこれくはびりすーいまーしーて

てもきくとでけるんすんまろぐ 図 てえもぐちちまんば
いふりんぐごつのおるとぶもぐ もつていうようみこ
ーをいふぐ生ーーん山のうちらでど 一梅ちうさて、
つろぐふつきだされさものはどのほーをまりていら
見るとのうまーこれくはーいつ成野造買
ではちつちうねーー来てさんはーとうとでふ
まそすんこてたまーものうち程ちーくの仕事
ちーーーぢーーれてはのがれやうにすうてんすれ

そうすれば いろうんへ京町一つあてこいろん
ぶぶ屋よりれてきまで中ごろかもはるし
おちゃ屋のあるいのあるいよりまめくよりまでろ
うまとつさかすこしもうこうつぶうこうこうつく
茨摩も船奪もうちとうこいうんを中ようう
さぶりこうこうこうこうだぜこいうものをんぶつま
うあうこうれまとかまこうぶ中ようまんをちつこ家と
うちまこうまんをあんまりふこうあうれして

肉屋のまんもうこうあるいて 揚 そしておめくんぶぶ
あんとんく 図 ちまが月はぶぶこうろうが力業でもできう
ちまこうかまでうる家もあるが武蔵鼠こいうもうちさ
ちまろが寛弁をかろもしあくかし大根やちんまんわ
うあちまぶうちまちまちまは国屋ちら麿よお神河の口
ちまんぶ中ちまうまだぶこうぶぶこうぶのれが生来るも
のの生命をかちまふうちまちまちまこうかぶぶしそ
ちまち 揚 ちまちまあれあんまいまちまひ事紙いうん

をたゝんでそうらうにて後ゞ伊ふさんのあとより
いせう
と
まよ愚癡のあるゝ伊久いらこの二人
はうきもどゝ人ゆゝそうく お芝の裾く
ちんゝそゝゝぬ新ますてなせど
おめくさんハ兵衛人がそんそゝゝしすも
ゆいまゝび外のあのいまゝものでもあるまゞせん
小だらゝしい 伊久 何の客ざかゝのきやくが
居やゝちづが多い 九郎 あの落あ人ゝたい本客の
ゆゝさ伊久入留るもあるゝやあゝが今ゝゝが
ゝゝゝゝでハあのゝゝさたもきゝんがたゝあて
もあゝの教ましんゝゝが初客じやゝゝてどこぞに
志のびゝゝまゝゝゆゝゆゝがにゝゝゝ名代左しゝ人
さがてゝゝゝゝでやハゝあの表志の裾のゝゝ
ゆえ新ゝがおやまゝかゝのゝの国おめくさんゝゝゆゝ
ゆえ地ゝゝるゝ事ないゝんまゝびとうちやゝく

おまへんし　嵐でぐんせう　伊　イヤうつちやつて
ゆひとれたり　をろけさ小便ちくおいてうろ〳〵
ぐもとしすにまくれぐ〳〵あさ酒のくろい嵐
じやこの伊久しつよいちりの猫ごゝろんでは
さんまぐりんの袋のねぐ〳〵ゆもうもこんぐけく
きとのぐやゝや水六〳〵やゝぬけろ〳〵やゝだらぐ
名のるひ人しきしいぐまぐろちぐうて知る人と
ありませねイヤ一寸大義ぐらい麦をちくひぐんせ

ヨル　いやりかぐせよはてすぐどうんせんめんぐ〳〵あへのりいら
さまうでもあろうれんかぐ〳〵ろれうてまんぐや
うう上方生れうまぐどゆ北よぐうあくあう
ぐひるゆよハ金しつすのが大分あるゆへ子ぶんふまぐ
といふくも金がマア人よたそら純る伊賀久しつよ
ものぐぐんを一辨とんくでまひひげあまぐど拉
てを無ぐ〳〵ゆうんせうすゆへ武廓でハ繁の伊久〳〵
もつて大度ぐぶ仏ほハんり蕎〳〵たいものぐやいやぐや

なりもたちず人の金銀をぞくてあげさせ品物を
貸或ハ家の内つゝ抜ハくほかゝ仲の所へ人
引づりこゝ名ゝ〳〵むすまんぬとゝ抜さんをの押
ぬきあらんぬを人よりぐあらゝ来たのもしひ
のゝいまれを口とゝくおもらで役目もの出
伊久のゝとゝ人ハいまれぬようにするゝとゝ
でもあれとゝずハ身清して用ゝつもてゝいるゝで
ゝゝいろぺいとゝるゝや渡でもゝんゝもつゝの

ハ高いゝゝ稼ハ出来まゝ〳〵ゝ美うもゝゝられまんゝゝ
ら四ゝらゝ〳〵ゝゝゝんぺりゝらひきるゝんゝゝゝんゝゝや
揚巻ゝのつゝゝんゝゝやゝゝらゝゝゝなんゝが九百里ゝ
拍を伸ゝゝゝ

やうでぜんをかんぞ〳〵いて〳〵金〳〵を重ぐ世界が
かまるものの〳〵そひをかんをかゝどくをお出をんして
も世界前まきらゝ紙をんを伊それたゝきのわく
助六をゝる中うみものがすきら揚アイさたのきゝい
のゝゝゝあのうち嘘とをんす鼻つきをを
をんをは付きでやきかんもをゝとおゝゝをんをも
いつていきにおりいひをゝどゆよいゝたおゝく
ゝんふかをゝゝずしゝてゝはもゝていをゝぐ

見ゝもゝけのありひきゝゝゝつゝゝゝ

屋ハ中〳〵ニア おめ人さん〻助六さんをゑ〻ぐ〻られで
雲〻〻雲〻〻中〻でもたまもろうえゐりの
ハざんせん 伊 そんな〻ぐ〻 揚 アイいやぐざんを
伊 しろ〻よりやはり〻たくいるうちハもひきろ〻〻
もはりつさぐそ〻きろひ事ハいられ〻〻〻分
一屋でもひとゑとゑ男のえ地清ぎて噂〻する
揚 かゝだ牛ハぐ〻しもけんけ 伊 中の伊〻ハ六
ゑ鼻あ〻〻て〻〻と 揚 ゑ〻〻〻

だざえもんよりや二階のつしまのさえもんやすえハ
さきつぐ間ハいつくるひ事があるあるハ明るく
くも責らるゝとも是ハの〳〵人様ハ勝本ざんまひよ
しておくんなんし
さきぐおいらんの一言まをれも二ろ矢をつぐ
のあくまかりくしてゝ下へ行きくなゝ
成いぢ
[illegible] さぐさのくざんしたろうかまぢあんどまん

きさの指でもつけさせる事でハざんまん今ハ仲の所く
おろうていきいす
しまーーのくちもやまを思ひやれまぢ
ワうれとする事きうんくまにしに法者つむ
[illegible] マレ あまがさくし
○二立目
揚屋ハ西ろりの人成蒲てられ見れつあ
も分こちまづ病気ハ引さげられ者

つまんとするものも門口の家紙をたべ
独淋しい家敵鳥も名をげ思ひ
なきいとぐいや婚丈人のものこまり新
那者もなくまえを絶食、七ちまて
まみぐしたる奥仕婚

おさと おいらんぐでござりまんねー
ぐらーぐ山ぐでぐ長
ぐぐどんよりうーおるりり 揚 おさぐさんどぐまんした 宝 ぐ
ハさうでもいくがおめえハなんぐ人世ぐにもくねてもは

ぬるもひさ にのようん金盛よもとれる人の男の素が
ぐはこひぐぐ山ぐるりもの人の紙者ぐもぐ色く
もれぐくぐよで主人ったて紙ついてかもとれとよ
でハすー出くつくる氣すぐ内ぐ（ハ行ってがら
ぐふあわはつくあげんぐ 揚 その世にいって
おくんぐんそのとるくんきくハせんぐどくもはさち
いくと出ぐくひとけぐぐんとくくつちぐくおいて
おくんぐんー 宝 つぐよぐくの事人 揚 十二ヵ とした

すでにはぶんぶんがさく（ぶんのかのといつておろんぶん
しそもまのめしためはぢうのこころひめとおもんに
まで脇をさくせいさぶ家のくでぶんと図おもん
ふてれべゆくるかどうぢみくしこがつくくるぜさ
るも関西でのてれしこハアノ世もワクひ不学ぶぶんが
おもくたてぢついてくぐをする家でもあろうぐ
おもくさ花でくだすび年季よ仮とたとそもそ
うハさせもまごあとひうくひつぶくくぬでみ

代のつぶさる事もあるあ人あてるまいつまでも脇
てさを面ぐくところひぶんしたとれハいかぶんに
人のうまとおしせうぢすうちきうぶんをろくおもん
ぶぐハ不簡才事でどんなぶ人といれるなな
ふんきりこつひとぶんどぶ赤まくろう秋おいまよ
ぶんぶんぐくいぶぐんと助ぶんしやれるもんひ
きるがいく揚おめえも事ぶ人ぶんぞのやうにぶわん
事をくぶんと思ひきるのうんのくうハ熱らし

いるすでぶぶんせん此ぶう（ごのようなつくりあつあつ
てもぶん燒のう（ぶぶんとそれでするつてくう
引込でいるれ（さりのあら実ぶひきくるくでも
あるれ人がたち（揚そんるるかいるんとう今の
表のさんくるハひと表ろ表ぶけでぶるつ手
ぶうるんぶるぶでぶあたのるひせん久今んのあゆく
世海ひるもあるるひあるるる時ぶるるんるる
らも見（いるするのるれぶひきれいるれ

さらぶひきんるんるる（実おめ（もぶるい屋あこふいる
く人のぶるるりでも揚（人ぶるるを表れ（つりり
だりるんるるつくれハるるれるるる縁るるりひした
ようるて深くおりいるおめえるるかんぶんの縁る表
表もる揚（人揚いるくくひるるるるるるるいるく
おるんるんるる何る揚ぶぶんせん（実されハるる低
のくるるりる見るるるるる表おめ（るりるんせん久（表を
知ねべ犬猫るぶうせん久ん（るるるるるるるるる赤る

う人の羅ぐごうであんのんうへそまこやせん
まさもひきせのくるあまそだ出るまでんあてを
つきくをされもちあんいんあまとびるあんそ乃
すびうちくさ男しいふすのはうハ家あのざ
ら邦ゆるうつるおあくうくそじあのうふてさ
あくそのえたよあうくつまりひとえん後悔あんを
であらくしあうくあうくあろぐくだ楊ちくせくく
でくもあんくでもおいくあんの男のんが替ふ

くさたをくぐらう来あくくりでもかきる人ハ
ざんせんめ六さんちんがうりがあるくさぐうするあで
ざんとたぐ死ぐちまらんとぶんのあでさんとのさ
宮おあんのようつよ交換をいつく深世ちけるも
のくのちあ瀬もかまいてがあるくせうしぶよ
とあれまきり内ふんが行かとあく家（本）
人さ若ひくさんの秋さ式家の門のあうち
くてひさくく出入ハ何の用あうそうん

揚屋さは（よりう

新恋　おいらんをのやうにあぐい形をさるすハねく
大くさをぶく人形をく見てさ〳〵も思ひがそふ
おやアわく（分）ものごとひ屋ちきでさく（ゆく）れかハ
命よ及ぶをもりつくひとを合を悪孫ぐいくもも
みる孫（こま）ふくこの廓（くる）ざをの紙ものをこうをまこられ
きりをるたの〳〵ぐ（ぎ）くつをかく〳〵ぐぐうつくも
のらしおをがはかく〳〵ふいふハ抑つひが按（おさ）紙おきてぐ

たて見（ふ）れぐあふやをうるのをそ〳〵の秘事おい
らんもかるく仏男うたえぐこををうに塞（さく）ている所へ
ゆをいに来ることおりあのがおをぐんひ〳〵ぐでをを
していれぬもりく事（こと）あをバ（ば）そ（ぞ）あ（ぞ）ふき
こをうしてきいてくんを外のるでもれ（ぐあ）ぐ
門のるひ〳〵をのぐ〳〵たるるぬりく（ぐ）ぬひ（ぐ）ろく
医者（いしゃ）ちをつくをるを者ものいしゃ庭も
来く〳〵おうく〳〵寝事（ねごと）（乱気（きぐ）とりををきれぐ（ぐ）来

のきくやもうとひとく引ぎ今ア、氣さく、のかさ
やさはるんでも法があるかとゝもうとそうそう
病狐とゝよハ女六さんよあえわくろれをしてかゝ
おこうと事きけだあ待までおとゝ見ゑとゝもか
六さんをさうり形くようづうとゝもしい中る客人も能
つとゝゆ家ぞろづゝひもゝとゝさゝのだみそれゝひそう
もゝく内でるくきてハ何ふづまりる客人の枕
よいひすゝむぞゝひよ中紙さゝよ野分ぎう

ハ助さんよ腹くゝれど不承知のそと紙巡ゝのうる
ぞゝくと手成ゝてきんゝとでゝ秋ゝ寒ゝ
ゝいるゝれゝゝゝゝゝをほるくく形ゝを見ゝふ病人
乃ゝゝあゝひのゝやゝんさ知ゝゝれハ親の明ゝゝ居
てゝんむゝくゝゝゝのあのゝゝふゝ待てん知ゝ
やゝゝれゝ家の時るゝるゝあゝくゝさんゝゝよ
さけゝゝれやゝゝあのの成つけいろくく家泥引を
さゝをとゝ世沢ハゆゝれんゝゝゝでこつゝのの

ゝハ思ひもよらぬ弘ゝゝさまを遂てゝ御ひさぐし
ぎゝゝまるし候をアどうゝゝゝもようもあるゝ
と思つても今ぢゃ中あの六さんとおめへのうも鄙
中でゝき名をたてゝらまたたき知ゝぬゝものもな
けれバきんつてもきれぢ切もせぬ中ゝハ出来
てゐるゝ主人うてもあんまり教よるが不便さ少しも
うちきゝけく助さんのゝるようつてくれ
まべつもひゝゝうのゝあゝハ伝のゝ品ゝしまえ

勝てゝ勝よといつてゝゝさぢ出ぬ思ふがさうもれぢ
へのかゝ助ゝ助して出るようで内所の私もさちゆき
ゆさんのゝるもゝるくいよゝけハ山ぐちまけバ伊久
ぢのやゝゝが助さんが残因のゝるゝつけまゝ次そ
ゝだあゝゝいつてゝ助さんぢのやゝふゝゝひて
も多勢よぶ出まさたゝゝるゝゝいがぢふふて
ゝぶあゝゝもゝまべゆさんも男れゝ地ぐ知ゝゝ
きゝゝゝの今づくよるゝ人のでもあゝゝれば

あいてんも見てんも出世のワキ三郎六さん今ちおらん
ありあり〳〵ぶ内のもの二三人のいのちあうぶほうおらんの
ムひしゝんで出ぶんもさけるこゝろ成りの実のゝこゝろ成
きゝなく見人なまろ形〳〵一生も二生も見てよきゝ数
若ひゝゝさゝもようゝ形うかいゝんも一且侍久のりゝ人
出まこびかのづゝうらゝもゝすくゝるゝこゝろやワの
むゝゝさんへいまるのゝけをゝゝみせをあまゝもゝゝゝい
やつまへ船へろうしまゝたゝんまゝけがワるくゝ

てえのゝゝとりみゝるゝゝもアろだゝよおらんのりゝ人
ゝちりゝゝらせ出ゝゝゝゝかまゝが引女男ゝかけてゝゝゝて
ゝる

ゝゝゝ成ゝけゝる一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝたゝるゝゝゝ
一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

横 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぶゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ寸の月もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つむ〻ぞんもぬ事(ぶ)小姓ふぐ者ゝいるんと
ゝきゝいゝゝゝゝゝゝゝ
まゝつゝさんゝぶ一旦ハきゝ狐ゝ助ゝゝんの子のゝゝに
あやまらあゝきゝくかゝハ者ゝゝこゝゝして配るもぬ
ゝのゝゝんゝゝすゝゝぬゝいらゝひきるゝゝゝどた
ゝハべゝゝゝゝもゝゝゝゝゝ 新 ゝんゝゝきゝゝぶけ
てゝまるのゝ 揚 いつゝゝ配ゝゝゝゝゝひハるまゝゝ
名ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ 新 ア、

流ん八三浦屋のおいらんとゝきゝゝけゝゝゝれゝの
ゝたゝゝゝゝゝゝゝゝ

も 彩 ちぐ〜のうちくしんぼう ちゑ 揚 ハアア〜〜〜

そんれい〜〜ト云うちゃ〜〜
ほうごとうり

場 ヲヤおいらん丈やせうにあがり
てきあうりゆきうせちく〜ご用ぐもいりぐらずき
うりゆきあんよ出る赤所のうけもたるしいう
ゆうあうりゆ〜〜さが方かどおいらんハ世ぶ前の氏
神さまござりやん 場 アノおいらんがらんぐみこし
たきや助さんがきれんしさうこてきや
ト元の事
ロとつけてきう〜〜ようて

たきや かりてきうりう おいらんさまいう
場 伊久さんがか出すんしさうせておうんすん

廿五屋 今までお出なされ申すんかしらお出あうきす
ぢやあおざりまたりん 場 そんなうりんおいらん屋
ていきひせう ト立ハれ遣とのそ
ちきしちゃ多へゆ 若衆 左花ゆう
アイとしいそきゆ〜せちう
系屋ぢがう奥のお 世ぶ おいらんお
おいらんのちかど 場 アイこてぐりの
めぐらひ アあぐりかりまし申 場 アイこてぐりの
ぎんもく ト元ん さんうとうけ中ぎんれの三まの相の内うる外六出 内六 ぶとうハ
ひさ〜〜引迎てくいるときひ さうんふきちハいうち
の内ぐらのあやアだまてうをわくというのるぐがら

ふくのつゝろハすゝぶくろハさゝぎくのくゝれてゝ
ゝゝゝ

をまちぐるやうるあけまれでぶぎんせん 図 てもえ
だうりハそうつてんすむ ぬんぞよ 陽 だうらしんそ
れざつてぞうそるものでぎんそまうぬうぬ落せて
ぎんそうそ 図 ちぢしんぞうこうそ うそうしうこうしうこうしうこ

ぞうまん 図 うんのかぶもうぞんきいめしてもかぶ
そうかう此上ふ百人のまんぐあらぶかぶをんく
うるかどそれぞやあ脇もたとふとまくまで
せうてハ多くの人のはのゆうこうぎくぎこの身
のそうえん 揚 ちうんかう 図 ゆうひおまぐりあ
もこしぶくりけとくハおのまぐうてのかりあの
も人手ぬかけどおれがたしてしたちゆるとちふふう
ふいうきあ
義 もしかうんうれくふとけのありそうおこふく

まんぐ〳〵トひきくぐゆるあげまれ
見まう屋ちゑどぐとふ義まて 揚 ちひきくまくつて
せうこよ外紙りて志角のひしさ 図 モウくんゆん
ぶくろぶあぶもさ
とゆくそひきくまくるまふうぐハ
京づよれあげまれもひくしくゆう
くくそこそくんぐして菓屋ぐの尺く
あくうこや法ゆき高まりろもよさ
しこむ稜

第六段 おいらんて 揚屋さんて（トヤらんちのこと） 早蕨

ちとうハてとでゆうゝとゝとゝ

ミアぎゝゝたらうゝざんせう 第七段 ゝゝ 硯箱の

ゝんのひきゆゝよ 百伸九ぢ ゝゝ

ゆうゝゝゝゝ入し 揚をつぎゝゝ 第八段 揚屋さんゝ 川 揚 ウゝゝトまぢて 早蕨

がつきひしゝゝゝ 女房 ゝゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ 揚 アイ 第九 ゆれうれしや

○四文同

ゝやりゝゝゝの人ゝハゝゝ屋へのゝあつまり大所

ひゝゝゝハゝゝゝまりわゝしゝゝゝゝ

ゝめゝゝひよ面ゝゝ人ゝ たゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ月の格ゝ

ゝれゝゝゝゝゝゝ猫ゝの

ひゝゝゝゝゝゝ歌ゝゝ

ゝのゝゝ員ゝゝゝ

まさ松と雷くろう義理と揚羽はあるこ
ろれさろうぐーるひもあんふさまあんな
そばらひきたそれ平茶屋ゆり
ぐけ 四段 おいんあくさんそりんのようでもざんせ
人わるまきろいつぐろそのやうふ正弁ゐ
く注ぐれぐーしておろんあんさんこ丑みどん
ろうこさんを人ゐ 五段 ちぐろ人のるぐろり
いつくいこふそつまいくいさんちゐるものぐう

さんのうおいんのうこうけはおめいようするぐ
い 早 さ行人ぐのう 五段 おゃえまろれれんでハるまち
つさるめぐ 六段 えんぐあいさろるこ行ぐゃゃあ行ぢ
うけへおれぐいゆうまろるのうころぐせもうこあゆうよ
見ろう成ていろを人おらんへちつとくんまりこ茶き
成ゐ付ゐさうまーるゐ本戸ぎこまりまりたよ
ころゐぐもあまこのりのおらんをいこう
つさこんゆくころう今やこうこまんれうら

てうちん見あてよ 助六 やア あけまきの 揚巻 長しき人

のうえよ そろまり 助六さん 大ぶ いりやぬいとハ〳〵〳〵〳〵〳〵のうえ

よ 挑灯 ぶのぐ〳〵 棒 鬼 のぐ〳〵

鉄 指 ぐちく〳〵〳〵〳〵

拍子木 かちく〳〵〳〵〳〵

廓の桜 大尾

梅暮里谷峩著

傾城貫二竹助道

いろ男指めいちはられ後に突あれぶ男指めいぶれ後まん解る書るかん

後篇 同廓之癖

時つくさこまてちうひいふうくまり言をつく〳〵ひの本をうきくるかん

三篇 同霄月之程

うれもたうひまりひいふ行ろれあふれもはあちび隣るくをあちかん

傾城買猫之巻

女郎のうそくとすくまれるよふにうきくる本ちまり

白狐通

北上の女郎の情うきあ方の海をするおりーろきかん

契情買言告鳥　つるのかひこそこまよ
ありしろきおちり

辛　同二篇廓之櫻　剛くるまいろくちのひいのこ
ぬてるまてちるちりしろきおと

酉　傾城買甲子夜話　甲子の夜ひるまとまふちゝ
てこちくろ　のあつまるをやく

新　契情買中夢之汗　著よ　そないこよまる
をふありしろきおり

版　鶴岡花撰帳　石己のきんのまとうきこる
ありしろき本ちり

追〻出来仕り百冊求序続可致候